

長尚幼て此枕之近ありて程迄此様子と存し
よん只今とて近し余の余少くも此様子と存し
自らの近きもあらず修理大夫殿の御事中心易く思
召は身に寄る余もせん如何様の事歟と云端心盡
なく此御身と云ふれ義光公快き風情も介
抱せられて起る我も今も知れぬ身と成りん細
く思ふ歟と云ふ連中余の家後の對面迄此様子の我
お果て修理大夫と云ふ若輩あれ他より如何なる
もはうかとし其御諸事能く頼り申あり亦代々
家の系圖も修理大夫成人と云ふ連中此様子と云ふ何やら

錦の代々入るる物に似し孩い長尚取取お戴き
諸より此羽のまゝ我ありと云ふと色にあられて浅ま
かりし次あり其時義光居苦しきとて居坐る神
も此枕の下に伏る太刀押取振打る切腹ひきしも剛なる
十郎も二つに成て伏るる相ある目頃の女望遠より
とて義光公も笑ひ云ふふ十郎の供人馳走の爲
座間に坐るる真にてお國の太鼓打氣を打て打ての
者共三方より押取込め一人も浅きとて討取る其中
よ飛鳥輕平とて近習に仕へし小男あり長刀の遠
者にて乞食者あるまゝの系府心許なく思ひて